

原 著

音楽による幼児の表現活動の意義と保育者の援助に関する研究

— 人とかかわる力を育むために —

中川 華那^{*1} 片山 美香^{*2}

音楽は、園生活の中で領域「表現」の活動の一つとして取り入れられているが、活動の在り方は様々である。本研究では、園生活における観察から、幼児の自発的な音楽を介した表現の実態を明らかにすることを試みた。その結果、幼児が自分の感情や状況を歌詞になぞらえたりして、自発的に音楽を介した表現を行う姿が見られた。音楽を介した表現によって、自他の感情調整の役割を果たすことが明らかになった。また、歌詞に合わせた身体表現は、未熟な言語力を補完する役割を担っていた。共通に知っている歌は表現したい意図や、感情を共有する際の媒体となって、幼児間のコミュニケーションを円滑にする役割も担っていることが示された。

幼児の自発的な表現を引き出すためには、保育者が音楽技術の習得を目指した指導的なかわりをするのではなく、音楽を介した自己表現として肯定的に受け止め、応答する援助が欠かせないことが明らかにされた。

キーワード：幼児、音楽、自己表現、援助

※1 岡山市立伊島幼稚園

※2 岡山大学大学院教育学研究科

I はじめに

1989年、幼稚園教育要領の見直しが行われ、保育内容が6領域から5領域として編成された。この5領域は、幼児の発達を捉えた視点であり、領域ごとに特定の活動を行うのではなく、環境を通しての教育と遊びを中心とする具体的な活動を通して総合的に指導されることと明記された。新設された領域「表現」は、それまでの「音楽リズム」「絵画制作」の枠組みや特定の表現方法にとらわれず、幅広く幼児の表現を捉えようとするものである。「音楽リズム」では、表現の喜びを味わうことが「ねらい」とされていたのに対し、「表現」では、表現しようとする意欲や態度が「ねらい」として挙げられ、幼児に身に付けさせたいこと、保育の中で重視されることに変化が見られる。領域が変わり、「ねらい」が変化したことに伴い、「内容」も変化した。音楽技術的な内容が多くあり、音楽能力を育てることが重視されていた「音楽リズム」に対し、「表現」では表現に向かう心情、意欲、態度を育てる記述が多くなった。その後、1998年、2008年と改訂され、2008年には保育所保育指針も同時に改訂され、保育内容の見直しが図られた。幼児の主体性や幼児の表現を認めることが大切にされ、日々

の生活の中で幼児が自発的に環境とかわり、表現を楽しむことが求められるようになった。また、「感じる」ことが表現を生むきっかけになるとし、感じることを重視すること、他児の表現に触れられるようにすることが加えられた。さらに、表現する過程を大切にすることも明記され、表現の技能よりも表現したいという幼児の気持ちが重視されている。

しかしながら、保育実践の現場においては、小林美実(2002)¹⁾が指摘するように、教育効果が顕著に表れやすい保育者支配型の技術指導中心の音楽活動や、保育者の苦手意識から音楽活動を回避しがちで結局何もしないなど、表現としての音楽活動のねらいが十分に達成されているとは言い難い。幼児教育における音楽活動は、理論的な指導や良い作品を作り上げることが目的とした活動ではなく、表現する過程を大切に、自己表現を楽しめる機会とすべきではないだろうか。

白石昌子(2008)²⁾は、表現について、「人間の内面にある思想・感情・感覚などを客観化し、感情・身振り・言語・音楽・絵画・造形など、外面的・感性的に捉えられるような形式によって表すことである」と述べている。幼児期には、自分の感じることや思うことを相手に伝えるために目的をもって何らかの形

で表現するようになる。自分の感情や思いを表現し、それを相手を受け止め、何らかの反応を得て、コミュニケーションが成立する。白石（2008）³⁾が、「乳幼児の表出が表現に変わっていく過程こそ重要である」と述べていることから、様々な表現手段を獲得し、表現の幅を広げて自己表現力の基礎を育む重要な時期が幼児期と言える。

橋本麻美・船橋篤彦（2012）⁴⁾は、知的障害児の集団音楽活動による「音に合わせた自由な動き（自己表現）」や「他者との協動的な動き（調和）の育成」について検討した。その結果、音楽は直接感情に働きかけるため、言語で伝え難いことも表現し易く、知的障害の程度にかかわらず、子どもとのやりとりが可能になることを見出している。音楽活動は、個人の発達レベルに合わせることが可能で、誰もが自由に自分を表現するのに有用であると捉えられている。そのため、幼児にとって、音楽活動を効果的に保育に導入することは、個々の自己表現力を引き出すと共に、幼児相互の表現活動を通して伝え合う力や共感性など、人とかかわる力を育むことにつながると考えられる。

そこで、本研究では、まず、園生活における、幼児の自発的な音楽を介した自己表現に焦点をあて、その実態を観察により明らかにすることを第1の目的とする。次に、音楽活動を用いた保育実践の観察を通して、幼児の自己表現力を引き出す援助のあり方について検討することを第2の目的とする。

II 研究の方法

1 対象

岡山市内の私立A保育所4歳児クラスに在籍する幼児25名（男児13名、女児12名）を対象とした。

2 研究の手続き

研究には、自然観察法を用いた。観察期間は2012年5月上旬か12月下旬で、合計24回の保育観察を行った。そのうち、外部講師によるリズム表現活動が4回実施された。

保育観察は朝の自由遊び場面から午睡までの間とし、日常生活やクラスでの設定保育において音楽を用いた表現や活動が行われた場面を観察・記録した。観察者から幼児に対する積極的な働きかけはいっさい行わず、幼児からの働きかけがあった場合にのみ応じる立場をとり、幼児の自然な姿を描出するように配慮した。

3 倫理的配慮

観察対象園には事前に園や個人が特定されないよう十分配慮して研究に反映すること、記録は研究のみに活用すること等について説明を行って了解を得た。

III 結果及び考察

1 日常生活における幼児の自発的な音楽を用いた自己表現

ここでは、幼児が日常生活の中で自然に音楽を使って表現していた事例を用いて、その実態を紹介する。幼児が音楽を介して自分の感情を表現することで他児の共感を得たり、その表現がきっかけとなって友達とのかかわりが広がったりする姿が見いだされた。

【事例1】7月31日 園外保育に行く直前

園庭に並んでいる時、B児はトイレに行きたくなる。担任に急いで行くように言われ、「急がなくちゃ」とトイレに走っていく。「急いで」と自分で何度も言っているうちに、“あわてんぼうのサンタクロース”の歌詞の「急いでリンリンリン」に変化する。後から来たC児はそれを聞いて、B児の顔を見ながら“あわてんぼうのサンタクロース”を最初から歌い始める。二人は歌いながらトイレに行く。園庭に出る時には、C児が靴を履きながら「急いでトントントン」と替え歌にすると、B児も一緒に歌いながら靴を履き、2人は顔を見合わせて笑う。

この事例では、B児が「急いで」と何度も繰り返し言っているうちに、急いでいる様がリズム感を伴い、既知の歌詞につながって音楽表現が生まれた。当初は音楽表現を伴う独り言であったが、同じ状況に直面していたC児の耳に入った。急がなければならないという感情に合った曲のイメージは、容易にC児に伝わって共有され、一緒に歌ったり替え歌にしたりする姿となった。幼児同士が既知の歌と一緒に歌うことで、歌詞や曲になぞらえたお互いの感情を理解し易くなり、共有出来たと考える。音楽を介することで感情の共有化が進み、コミュニケーションの成立を促したと言えよう。お互いに顔を見合わせながら歌うことは、言葉でのやり取りが少なくても一体感を持って、感情の共有化を図る要因となった。

【事例2】7月31日 朝の自由遊び

外に遊びに行こうとするE児は、持ち物の片

付けが終わっていないD児に「先に行くよ」と言う。D児は「だめー」と怒り、急いで片付けて保育室を出ようとする。E児が「帽子かぶらんといいけんよ」と言うと、D児は少し機嫌が悪くなり黙る。そこに、外で遊んでいたF児が帽子を忘れていたことに気が付き、「魚がはねて」と歌いながら、帽子を取りに保育室に戻ってくる。「魚がはねて ぴょん 頭にくっついた 帽子」と歌いながら帽子を被るF児を見たD児は、少し笑顔になる。その後、E児も一緒に歌い始め、F児と跳びながら歌う姿が見られた。D児はその様子をじっと眺め、E児とF児が歌い終わると、3人は顔を見合わせて笑顔になる。D児は気持ちが変わったのか、自分の帽子を取りに行く。その際、自分から歌い始め、ついには3人で声を合わせて歌った。それぞれが頭の上の帽子に手を当て、片足を出したり曲げたりとポーズをとり、その姿を見合って笑った。

これは、F児が帽子を被るという行為に対して、普段している手遊び歌を連想して歌ったことで遊びの楽しい要素が加わった事例である。その楽しさがD児の不機嫌な感情を好転させ、さらにその歌を介して友達とのかかわりが生まれた。F児は周りの幼児が自分の行為の面白さに共感してくれたことに、D児やE児は生活の中の面倒な行為に楽しさが見いだされたことに喜びを感じ、音楽表現を伴った遊びに発展した。言葉で「入れて」と言わなくても、音楽を介して自然に仲間との遊びが開始され、友達が受け止めてくれることで表現の楽しさが増した。音楽が他者とのコミュニケーションのきっかけとなる特徴を有していることが窺える。誰でも参加でき、心を通い合わせることが出来る音楽の特徴は、幼児にとって親しみやすいため、日常生活の中で他者とかわるきっかけとして有用である可能性を示唆するものである。歌詞や曲がもつイメージは幼児の表現をより具体化し、他児に理解されやすくするため、幼児同士のコミュニケーションを円滑にした。また、音楽を介することで楽しさが加わり、D児のように帽子を被る行為への不機嫌な感情を和らげる感情調整にも寄与することが示された。

【事例3】8月7日 朝の自由遊び

隣のクラスから“ノコノコキノコ”の歌が聞こえてくる。G児が音楽に合わせて踊り始めると、H児とI児も踊る。H児が「大きい声で歌っ

てるよ」と言うと、G児が「どのくらい?」と尋ねる。H児が「これくらい」と大きく踊って見せるとI児は、「えー、これくらい?」と大きく手を広げて跳び、3人は声を出して笑う。そして、“ノコノコキノコ”を「大きいキノコ」の替え歌にして、輪になり回りながら飛び跳ね、大きなキノコになりきって踊る。

H児は、最初、声の大きさを伝える手段として身体表現を使った。しかし、友達とやり取りをしていくうちに、大きさを伝える手段というよりも、大きさを全身で表現すること自体に楽しみが移ったようである。言葉に合わせた身体表現の模倣や、新しい動きを考えて他者に働きかける表現の広がり、表現したい意図を共有するだけでなく、表現を創造する活動へと発展した。言葉でのやり取りで十分に思いを表現することができにくい幼児にとって、この事例においても音楽を介した身体表現は、喜びや楽しさなどの感情をも共有する媒体となり、幼児間のコミュニケーションの手立てとなった。呼吸を合わせて歌ったり踊ったりする音楽を介した表現活動は、他者と充実感や満足感を分かち合ったり、共有したりすることを容易にさせ、一体感が生まれやすいようである。

以上から、幼児が日常生活の中で、自発的に音楽を介した表現を通じて感情や状況を表現して共有していることが示された。共に既知の歌詞や曲想が言葉の代弁や補完機能を担っていることも示唆された。

2 クラス一斉の音楽活動の中で見られる自己表現

先述の通り、幼児は日常生活の中で自発的に音楽を介して感情や状況を表現したり、コミュニケーションの媒体としている姿が見いだされた。

保育者がクラスの一斉活動として音楽を用いる場合には、どのような自己表現が見られるのだろうか。

幼稚園や保育所で多く見られる音楽活動として、歌唱活動がある。観察では、保育者がピアノを伴奏し、それに合わせて幼児が歌う活動がよく見られた。歌うこと自体を楽しむのはもちろん、友達と一緒に歌うことや、友だちと相互に身体を使って表現し合うことを楽しむ姿が観察された。幼児期の音楽活動は身体表現であると言っても過言ではない(今村方子, 2004)⁵⁾ という指摘のように、幼児期の音楽表現と身体表現には密接な関係があると言える。

観察された事例における音楽を介した自己表現を、

音楽に合わせて動きが自然に表れる「無意識的な身体表現」と、自分なりにイメージした「意識的な身体表現」に分類した(表1)。

幼児は音楽のメロディーやリズムを聞いて、その曲の雰囲気を自分なりに感じ取って自然に意識せず身体で表現する一方、感じ取った雰囲気やイメージに合致する心地よい動きを選択し、意識的に身体で表現する姿が見られた。音楽が自発的で、自由な幼児の表現を引き出していると考えられた。白石(2006)⁶⁾は、「音楽が誘発する身体の動きは拍子に合わせた動きばかりではなく、心の動きがストレートに身体の動きとなって表現されたり、音楽から受ける印象によって心が動いて身体の動きとなって表現されたりする」と言う。このように生じた自らの表現は、他者にどのように受け止められるのであろうか。

【事例4】 10月16日 外部講師の表現活動

「あくしゅでこんにちは」の曲を講師がピアノでリズムやテンポを変化させて演奏し、幼児はそれに合わせて歩いたり、スキップしたりと保育室内を自由に動く。演奏の仕方が変わると幼児の動きにも変化が見られた。

この事例では、演奏が変わると幼児の身体表現に変化が見られたが、幼児間の身体表現に大きな違いは見られなかった。これは、幼児間の曲に対する認識や感じ方にある程度の共通性があることを示唆するものである。他者にあることを伝えるという目的をもった表現ではなくても、音楽を聞いて感じたイメージを表した身体表現に共通性が高いため、その同調的な行動が他児との心理的な一体感を高め、心理的な体験を相互理解する媒体となっているのではないかと考える。このような体験は、言葉はなくても、非言語的な自己表現をもとに他児とコミュニケー

ション出来るという重要な体験になっていると言えよう。その他に観察されたピアノ演奏と、幼児の身体表現の関連を表2にまとめた。

表2 曲の変化と幼児の身体表現の変化

ピアノ演奏	幼児の身体表現
高音・早い	・声を出して笑いながら走る。
高音・遅い	・嬉しそうに笑いながら歩く。 ・手を大きく振りながら歩く。 ・スキップをする。
低音・遅い	・ゆっくり歩く。
短調	・忍び足で歩く。 ・下を見ながら歩く。
タツカのリズム	・スキップをする。 ・一緒にスキップをし、顔を見合わせて笑う。 ・飛び跳ねるように歩く。
演奏を止める	・その場で止まる。 ・静かになる。

テンポが変われば幼児の動きの早さが変わり、リズムが変われば幼児の動き方が変わるなど、音楽と幼児の動きの対応が見てとれた。また、高音と低音での表現のあり方を比較すると、高音の方が低音よりも笑顔が多く見られ、身体表現が大きくなっていることから、曲の明るい雰囲気を感知取って表現していることがわかる。また、短調になると、視線を下に落としている姿が見られたことから、暗い響きも感知取って表現していることと推察された。白石(2006)⁷⁾は、音楽にはある程度、共通して人に与える心情的印象があることを指摘している。幼児なりに曲の雰囲気を感知取り、全身を使って表現出来ること、そこには、他児との高い共通性が見られることから、言葉でのやりとりがなくても、お互いの心情を相互に理解し易いのではないかと考えられた。

言葉がなくても、音楽を介して表現することは、音

表1 歌唱活動における幼児の身体表現の種類

	動き	曲の特徴	事例
無意識的な身体表現	リズムに合わせて動く	ゆったりした曲	・「しゃぼん玉」(曲に合わせて身体を左右に揺らす)
		リズムカルな曲	・「バスごっこ」(リズムに合わせて膝を曲げる) ・「そうだったらいいのにな」(リズムに合わせて手を振る)
意識的な身体表現	登場人物になりきって動く	動物などが出てくる曲	・「小鳥のうた」(「ピピピピ」の部分で手をバタバタさせて鳥になりきる) ・「おばけなんてないさ」(手を前に出し、おばけになりきる)
	ポーズをとる	掛け声がある曲	・「やまびこさん」(「ヤッホー」の部分で口に手をあてる)
	歌詞からイメージできる振り付けをする	擬音語や擬態語がある曲	・「あわてんぼうのサンタクロース」(「ドンドン」の部分で足踏みをする) ・「ホホホ」(「ホッホッホッホ」の部分で腰に手をあてて腰を振る) ・「南の島のハメハメハ大王」(「ハメハメハ」の部分で手をうねらせ、左右に動く)

樂にかかわる共通のイメージを持ちやすいという特徴が効果的に作用し、言葉での表現が未熟な幼児であってもお互いの心情を理解し、円滑にコミュニケーション出来る可能性が示唆されたと言えよう。このことは、保育に音楽を用いた活動を積極的に取り入れることの有用性を示すものであろう。

また、歌唱活動には笑顔が多く現れるという特徴も認められた。日下裕弘・安藤一史(2003)⁸⁾は、笑顔の意味するものは、他者・仲間との共感のコミュニケーションであり、仲間を前にして身体(満面)に表現された『心の嬉しさ』であり、仲間との目に見えない『共属感情(ラポール)』そのものであると述べている。友達と顔を見合わせ、笑顔になる活動は、他児と肯定的な感情のやりとりを体験する活動でもある。また、笑顔は自己肯定的かつ他者肯定的で協調的な態度(宮川澄子, 1995)⁹⁾を生み出し、お互いに相手の枠組みに基づいて理解し合うこと(斎藤秀文, 1993)¹⁰⁾でもあると言う。音楽を介した他者とのかかわりは、肯定的に自己が受け止められ、他者を受け止める体験となり、人とかかわる力を育むことにもつながるのではないかと考える。友定啓子(2012)¹¹⁾も、笑顔が重要なのは人間関係に関連しているからであるとし、相手が笑ってくれると自分が受け入れられたと感じることから、笑いが人と人を結びつける統合機能を有すると指摘する。今回、歌唱という音楽を介した表現活動が笑顔を表出させ、さらにその笑顔が他者との肯定的な相互交流を促し、人間関係を育む触媒となる有用な活動としての可能性が見いだされた。また、このような肯定的な体験がさらなる自発的な音楽を伴った表現活動への動機づけを高め、日常生活における、自発的な音楽を伴った自己表現の活性化につながる可能性も示唆された。

さらに、観察されたクラスの一斉活動に取り入れられた音楽を介した活動には、幼児の主体性を尊重する活動となるような保育の質が担保されていたことにも重要な意味がある。音楽活動としての出来栄が目標となる場合には、活動が保育者主導になりがちであるため、幼児は受動的になる傾向がある。そこでは、幼児自身が工夫して、活動を展開する主体性に基づく体験が十分に得られない。観察事例のように、幼児が音楽を介して自由な発想を持ち、身体や笑顔といった表情、視線を落とすといった仕草等で表現することに保育者が敏感に気づき、肯定的に受け止めることが、表現としての意味を強化し、他児にも理解・共有されて、相互に一体感を味わう体験へとつ

ながるのではなかろうか。音楽を介した保育は、幼児の感情に直接はたらきかけて豊かな表現を生み出し、他児とのコミュニケーションを活性化させる有用な活動であることが明らかにされたが、そこには、活動が有用に機能するよう環境構成を含む保育者の援助が欠かせないことも確認できた。

続いて、音楽を介した活動の利点を生かしながら、幼児個々の自己表現を促し、幼児間の円滑なコミュニケーションを活性化するための保育者の援助について検討を加える。

3 幼児の自己表現力を育む音楽活動における援助

音楽を介した保育の質を高める援助の特徴について、観察された幼児の表現する姿から、「表現の自由度」と「表現の広がり」という2つの指標の組み合わせによる分類を試みた(図1)。

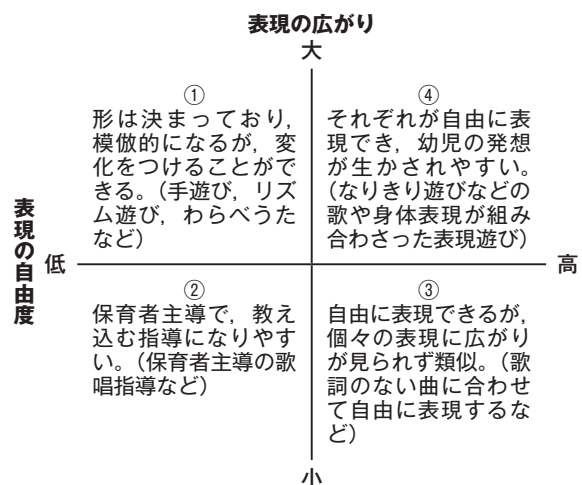


図1 幼児の表現と音楽活動の関係

「表現の自由度」は、ある程度の決まりの中で幼児が自分なりの思いや感じたことを様々な方法で表現できること、「表現の広がり」は、あることを題材として発展させる表現ができることと定義した。

分類①は、表現の自由度は低いですが、表現に広がりを持たせることは可能な活動である。それぞれの表現は決まっており模倣的にはなるが、変化をつけることは可能である。具体的には、手遊び、リズム遊び、わらべうた等を用いた活動がこれに該当する。分類②は、保育者主導で、教え込む指導になりがちな活動をさす。具体的な活動としては、保護者に見せるため等、音楽技能の習得といった達成目標の明確な、保育者主導の歌唱指導等がこれに当たる。分類③は、自由に表現できるが、個々の表現に広がりが見られず

類似した表現になりがちな活動をさす。具体的な活動として、歌詞のない曲に合わせて自由に表現する等が挙げられる。分類④は、それぞれが自由に表現でき、各自の発想が生かされやすい活動である。なりきり遊び等の歌や身体表現を組み合わせた表現遊び等が具体的な活動として挙げられる。

分類の結果、より主体的な自己表現力を育むのは、歌と表現を組み合わせた、分類④の活動であると考えられた。この活動は、保育者主導の指導的な活動とならず、幼児の素朴な表現や自由な発想を十分に尊重した活動を促すことに因る。

保育者が、幼児の自由な発想に基づく表現の在り方を保障し、認めたり、言葉にして返したりすることで、幼児の表現しようとする意欲を高め、表現に広がりをもたせることにつながる。一方、決まった形での活動や保育者の要求に応じるよう促される保育者主導の援助では、幼児の自由な表現意欲は閉ざされ、表現の広がりも見られなくなる。出来る限り、幼児自身が主体となった表現意欲を保育者が受け止め、尊重することによって、個々の発想に基づく表現の広がりを保障する援助が重要であろう。園では音楽を用いた様々な活動が行われ、それぞれの活動がもつ特長は異なるが、保育者の意識や援助の在り方次第で、活動の質は多大な影響を受けると言えよう。

観察した音楽を介した活動から、幼児の豊かな自己表現力や他者とのかかわる力を育むための援助として、7つの主要な援助が導出された。事例に基づいて順に具体的な事例と共に示す。

(1) 安心できる環境をつくる援助

【事例5】5月8日

保育者と幼児が全員輪になって椅子に座る。保育者の鉄琴のリズムに合わせて一人ずつ名前を呼び、幼児もリズムに合わせて返事をする活動。J児は、自分の番が来るまでは笑顔で待っていたが、名前を呼ばれると下を向く。担任保育者の方を見て、小さな声で返事した。

J児は、名前を呼ばれる事を楽しみにしていたが、いざ自分の番になると、みんなに注目されることで緊張し、不安になったようである。しかし、担任保育者がうなずいたことで安心感を得て、その後の活動には楽しそうに参加できた。この事例から、幼児の自己表現力を育むには、安心できる環境づくりが基盤となることがわかる。保育者と幼児とが信頼関係を築いていることが幼児の表現力を引き出す礎と

なると言えよう。

(2) 興味・関心を引き出す援助

【事例6】7月10日 「あまだれさん」を歌う

保育者：「♪つーぼちゃんっていうの」（雨だれを見るように上から下に目を移しながら）

「つーぼちゃんっ・・・っていうんだって」

幼児：「つーぼちゃんだっー」（笑う）

ピアノ伴奏に合わせてみんなで歌う。

H児が、「つーぼちゃんっていうの」の部分で、人差し指を出して手を上にあげ、下にゆっくりと下ろし、雨だれを表現する。

幼児は、擬態語や擬音語に関心を抱く。幼児期に好まれる歌の中には、擬態語や擬音語、動物の鳴き声、掛け声等が含まれていることが多い。幼児の心に響き、興味を引く歌を通して、様々な音を知り、日常生活の中でも音に関心を持つようになって、表現のイメージが豊かになるのではなかろうか。これは、現行の保育所保育指針¹²⁾の「言葉」の内容「⑨生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く」という内容にもつながり、図1の④の活動に位置づけられよう。幼児が自由に音に関心を持ち、日常生活の中でそれを自由に表現しようとする意欲を引き出す援助が重要であることがわかる。

(3) イメージを膨らませる援助

【事例7】5月8日 「魚がはねて」の手遊び

幼児：「魚がはねて びょーん」

保育者：「頭にくっついた！何かなー？」

幼児：「ほうし！」

A児：「魚のほうしー？」（笑う）

幼児：「魚がはねて びょーん」

保育者：「ほっぺにくっついた」

幼児：「えー？ほっぺ？」

D児：「おばけ」（ほっぺに手を当てる）

保育者：「あ、おばけかな」

K児：「おけしょう」

保育者：「ボンボンってお化粧かあ」（手をほっぺにあてながら）

その後、以下のように変化させて繰り返した

「おなかにくっついた」→「だっこ」

「背中にくっついた」→「おんぶ」

「手にくっついた」→「てぶくろ」

保育者の問いかけや活動の展開の仕方によって幼児のイメージの広がりや変化は変化する。1つのことから

様々なイメージを膨らますことができる素材は、幼児にとって魅力的であり、主体的な表現意欲に直接的な働きかけとなるであろう。また、視覚的な素材もイメージを広げることに有効であることが示された。幼児自身が考えたり、発見したりすることが自発的な表現の前提になるとすれば、幼児が何かを感じるきっかけを提供することも、保育者に求められる援助の1つと言えよう。臭覚、味覚、触覚も含め、五感に働きかける活動を通して幼児のイメージは広がり、豊かな表現力を引き出す契機となる。例えば、触覚や味覚、臭覚を使って感じたものを音にして表現したり、逆に、音からイメージを広げ、触覚や味覚などを表す言葉で表現したりするなどの活動が考えられる。保育者が“音楽＝聴覚”と固執せず、様々な感覚を刺激して総合的に豊かなイメージを広げる援助が、幼児の豊かな表現力を育むことであろう。

(4) 共感し、認める援助

【事例8】5月8日

保育者がウッドブロックのリズムに合わせて順番に輪になっている幼児の名前を呼ぶ。幼児はリズムに合わせて返事をする。

保育者：「Lくん」

L児：「はあい」（低いガラガラ声で返事する）

保育者：「Lくんは何かになって返事したのかな？」

幼児：「かばみたーい」

「かいじゅうみたい」

保育者：「そうだね。Lくんに聞いてみようか。正解は？」

L児：「カバ」（恥ずかしそうに答えた）

幼児：笑う

L児：周りを見ながら笑う。

保育者：「Lくんはカバの声で返事したんだね」

その次からの幼児は、お姫様になり「おほほほ」と返事をしたり、ライオンや怪獣になり、大きな声で返事したりした。また、羊やヤギになり「メー」と返事したり、ゴリラになり「ウッホッホ」と手を胸に当てたりきって返事したりする等、様々な表現をした。

これは、リズムに合わせて返事をするという活動であったが、L児は型通りではない、自分なりの表現をした。保育者のねらいとはやや異なっていたかもしれないが、L児の表現を“ふざけ”と否定的に捉えるのではなく、その子なりの独創的な表現として

肯定的に捉えて問いかけたことにより、周りの幼児も独創性を意識し始めた。また、保育者だけでなく、他児の「〇〇みたい」という応答が友達に認められたという自信につながり、さらなる表現につながったと考える。幼児の楽しさや嬉しさという“心情”や、自分なりに表現しようとする“意欲”は、幼児の心が動かされる体験を通じて生み出される。表現には、正答がないため、幼児一人ひとりを十分に認めることが出来る。動かないことも表現であり、表情を変えずに無表情でいることもまた、表現である。見過ごしがちな普通に見られることにも、個々の幼児の自分なりの表現が無限にあると考えられる。保育者がこのような意識をもって個々の幼児の些細な表現にも目を向け、受け止め支えることが、自己表現力を育む上で重要な意味を持つであろう。

(5) 表現を引き出す言葉かけを工夫した援助

【事例9】10月16日

保育者：「ふじ組さん」（リズムカルに言う）

幼児：「はあい」（大きな声）

保育者：「じゃあ、次は桃色の声で言ってみよう。

桃色の声ってどんなこえかな？ふじ組さん」

幼児：「はあい」（少し小さめの優しい声）

保育者：「白色の声は？ふじ組さん」

幼児：「はあい」（さらに小さな声）

保育者：「透明の声は？ふじ組さん（口だけ動かす）」

幼児：「はあい」（口だけ動かしたり、囁くくらいの小さな声で言ったりする）

保育者：「じゃあ、青いお空の声は？いくよー！ふじくみさん」

幼児：「はあい」（大きな叫ぶような声）

保育者：「今のは、お空が怒っていたのかな？じゃあ、笑ったお空の声は？」

幼児：「はあい」（叫ばず、元気のいい返事）

その後、内緒の声→少し遠くの人と話す声→もう少し遠くの人が話す時の声など様々な表現を楽しんだ。

これは、保育者の言葉かけの仕方が幼児の表現を豊かにしている図1の①に相当する援助事例であると考えられる。保育者が表現するイメージを限定する問いかけを行うため、表現の自由度は狭まるが、個々の表現の広がりや尊重するよう応答していることが見てとれる。「小さく」、「綺麗な声で」等と指示的な

言葉かけをしなくても、「透明の声で」、「桃色の声で」等、幼児が自分なりのイメージを広げられるような言葉を工夫することで表現に広がりを持たせられる。音による表現の楽しさを味わいつつ、表現の多様性や自分らしさ、さらには他児の表現に触れることで他児らしさといった個性の発見等を体験する活動へと導くことが出来るであろう。

(6) 幼児の発想を活動に生かす援助

【事例 10】 7月 10日

♪両手を合わせて バンバンパン 指先使って
トントントン おにぎりにぎって ポンポコボン
バンバンパン トントントン ポンポコボン
歌い終わると、

M児 : 「ワニのおにぎりがいい」

D児 : 「ワニのおにぎり細いよ」

A児 : 「だったら、ポンポンポンじゃなくて、スルスルスにすればいいが」

保育者 : 「細いおにぎりだもんね。じゃあ、スルスルスで、細いわにのおにぎり作ろうか」
替え歌にしてもう一度する。

J児 : 「へビは？」

N児 : 「全身をうねらせへビを表現する。」

保育者 : 「ぐによくによおにぎりだね。どうやって作る？」

幼児 : 「声を出して笑う」

D児 : 「指先細いおにぎりを作る動作をする。」

保育者 : 「じゃあ、こうやって (D児の動きを真似る) 作ろうか」

この活動は、幼児の発言を基に展開していく。保育者の考えを押しつけるのではなく、幼児の自由な発想を広げていくことで、様々な表現が生じている。これは、表現の広がり、自由度が共に高い図1の④の活動として捉えられよう。表現の広がりや自由な表現を促すために、1人の発言を取り上げて全体で共有できるような援助を積極的に行っていることも特徴である。

幼児は想像力が豊かなため、保育者が予想していなかった反応が返ってくることもあるであろう。そのような反応をどのように受け止めるかが、幼児の次の表現に影響を及ぼす。本事例の保育者は幼児が豊かな発想を活かした表現を十分に受けとめ、言語化して応答したことで、さらなる豊かな表現活動へと発展させることが出来た。保育者の思い込みや偏

値観で判断せず、幼児の表現をありのまま受け止め、認めることが、人とかかわりの中で自己表現することの楽しさや喜びの体験につながり、さらなる自己表現の原動力になるのではなかろうか。

(7) 友達の表現に触れられるようにする援助

【事例 11】 5月 8日

全員が輪になって椅子座っている。

保育者 : 「♪お池の中からアヒルが出てきて・・・アヒルってどんな声かな？」

A児 : 「グアグアグア」(手を腰に当てパタパタさせながら輪の中央に向かって歩く)

A児のなりきる姿を見て、周りの幼児も小さなアヒルや走っているアヒルなど自分なりにアヒルを表現する。

保育者 : 「そうだね。アヒルはグアグアってなくよね。今いろんなアヒルさんがいたね。」

「グアグア・・・」(アヒルになって動く)

幼児 : 笑う。

保育者 : 「アヒルが出てきた次は、何が出てくるかな？」

幼児 : 「魚」「カエル」「めだか」(口々に言う。)

保育者 : 「じゃあ、魚がでてきたよ。」

A児は、誰よりも早く動き始める。それに続いて、周りの幼児もA児の真似をしたり、自分なりに、なりきったりする。J児は魚になりきりながら、A児の後ろをついて回ることを楽しむ。A児もJ児がついてくるのが嬉しい様子で、後ろを気にしながら動く。

友達の表現を見ることは、自分の表現を広げるきっかけとなる。これは、2008年改訂の幼稚園教育要領の内容の取扱いに「他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切にして自己表現を楽しめるように工夫すること¹³⁾」という記述が加えられたことから、その重要性が見てとれる。事例に示したように、輪になって活動する環境が、他児の表現から刺激を受け、表現を広げるきっかけとなった。

また、自分なりの表現をした幼児が他児に認められたり、自分の表現をなぞられたりする体験は、それ自体がコミュニケーションとなり、音楽を介した表現活動が、人とかかわる力を育む一助となる可能性を示したと言えよう。

IV まとめと今後の課題

保育場面の観察を通して、幼児が自分の感情や状況を歌詞や音、リズムになぞらえ、自発的に音楽を介した表現を行う姿が見られた。また、音楽を介した表現によって、自他の感情調整をしたり、身体表現を通じてコミュニケーションをとったりしていたが、言葉で十分に思いを表現することができにくい幼児にとって、重要な表現媒体となっていることがわかった。このような幼児の自発的な表現を保育者がどのように捉えて応答するかが、表現活動に影響を及ぼすことも明らかになった。幼児の表現は、自分らしさの表現でもある。自らの表現が周囲の人に肯定的に受け止められることが積極的な自己表現に促進的にはたらくことが示された。このような表現を育むには、保育者が表現の結果だけでなく、表現の過程を大切に援助することが重要であった。幼児が何を感じたり、イメージしたりして表現しているのか、その心情に至った状況を含めて保育者が理解し、肯定的に受け止めることが幼児の表現力の育ちにつながる援助となる。些細な表現であっても敏感に気づき、それを基に活動を発展させる援助を行うことも、自然に自分なりの表現力を育むことにつながることも明らかになった。発表会に向けた技能習得型の指導や、保育者が設定した目標を達成するための保育者主導型の保育に陥らないよう、幼児の主体的な表現を引き出す援助を意識して行うことが幼児の表現力を育む保育者の力量と言えよう。

また、音楽活動を通して、幼児が身体を使って表現し、その表現を保育者や他児に受け止めてもらったり、他児の表現を受け止めたりする相互交流の体験がコミュニケーションそのものであることも事例により示された。音やリズムを共有したり、同じイメージをもったりすることは、音楽をみんなで楽しみながら一体感を味わう体験となった。このような体験が、人とかかわることの楽しさや喜びを知る契機となり、人とかかわる力を身につける原動力となるであろう。

音楽を介した自己表現には、正解がないことも個々の自由な自己表現を価値づけることになった。また、音楽を介した身体表現は、言語力が未熟な幼児であっても音やリズムがイメージを活性化させ、自分なりの発想や考えに基づく表現を生み出し、他者にも理解されやすいという利点があるため、未熟な言語力を補完してコミュニケーションを成立させることにも寄与していた。また、音楽を介した表現活動の中で、

自らの表現を保育者や他児に受け止められる体験を通して表現することへの自信を培い、自分らしく表現する、また相手のその人らしい表現を受け止めることを体験する。そのため、音楽を介した表現活動は、幼児自らが表現することを楽しむのはもちろん、その表現を他児や保育者と共有し易いという特長があるため、人とかかわる力の基盤を育む有用な活動であると言える。このような音楽を介した表現活動を幼児の成長に意義ある活動として生かすには、保育者が個々の表現を肯定的に受け止めたり、他児の表現に触れられるよう配慮したりなど、自己表現を豊かにすることを意識した援助の実践が不可欠であることも明らかになった。

今後は、乳児と養育者の間で音・音楽を媒体としたコミュニケーションが成立する(細田, 2002)¹⁴⁾との知見も見られることから、対象となる幼児の年齢幅を広げ、発達的な観点から音楽を介した自己表現活動の有用性について検討したいと考えている。

引用文献

- (1) 小林美実(2002) 幼児の表現, その考え方と教育, 保育学研究 40 (1), 104-113
- (2) 白石昌子(2008) 乳幼児の音楽表現 保育音楽研究プロジェクト(編集) 青いみかんと一緒に考える 幼児の音楽表現, 23 - 30
- (3) 前掲 (2)
- (4) 橋本麻美・船橋篤彦(2012) 集団音楽活動による知的障害児の「環境に適應する力」の育成—「自己表現」や「他社との調和」を育てる支援の検討, 障害者教育・福祉学研究 8, 1-11
- (5) 今村方子(2004) 音楽表現の実践 谷田貝公昭(監修) 保育内容シリーズ5 音楽, 一藝社
- (6) 白石昌子 (2006) 乳幼児の発達と音楽の関係—音楽の機能が及ぼす影響についての検討を通して—, 人間発達文化学類論集 3, 13 - 25
- (7) 前掲 (6)
- (8) 日下裕弘・安藤一史(2003) 自然遊びにおける子どもの笑顔とその「身体」, 体育学研究 48 (5), 585-600
- (9) 宮川澄子(1995) よい自分表現してますか, 早稲田出版
- (10) 斎藤秀文(1993) 伸びる子に育てる—お母さんの顔・先生との協力—, 田研出版
- (11) 友定啓子(2012) 子どもの笑顔のもつ意味(特集 笑顔のない子), 児童心理 66 (14), 1164-1170

- (12) 厚生労働省 (2008) 保育所保育指針—平成 20 年告示. フレーベル館
- (13) 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領—平成 20 年告示. フレーベル館
- (14) 細田淳子 (2002) 言葉の獲得初期における音楽表現—身体で感じるリズム—. 東京家政大学研究紀要 1 人文社会科学 42. 133-139

謝辞

本研究を執筆するにあたり, ご協力くださった先生方, 園児のみなさんに深く感謝申し上げます。

付記

本研究は, 平成 24 年度 岡山大学教育学部学校教育教員養成課程幼児教育コースに提出した卒業論文の一部を加筆・修正したものである。

A Study for Significance of Child Expression Activity by Music and Support of Childcare Worker

For Fostering Interpersonal Relationships of Children

Kana NAKAGAWA *¹, Mika KATAYAMA *²

Music can be adopted as one of the domain “expression” activities in the kindergarten, but the way of such activity would vary. In this study, it verifies an actual condition of expression through child’s autonomous music from the observation in kindergarten life. As a result, it was observed that a child described his own emotion or situation with a lyric and also autonomously made an expression through music. It was clarified that an expression through music played a role as an emotional adjustment for themselves and others. In addition, a physical expression along with lyric also played a role as complementing an immature language ability. For eliciting a child autonomous expression, it was clarified that a childcare worker should not have an instructive involvement for learning music skills but should positively receive it as a self-expression.

Keywords: preschool children, music, self presentation, Support

※ 1 Ishima Kindergarten

※ 2 Graduate School of Education, Okayama University
